

六十八ある。その鎮圧に軍隊の出動した地点は三十四市、四十九町、二十四村、合計一〇七カ所で、出動兵力のもっとも多いときは二万二千人以上、のべ総兵力は五万人をこえる。かなりの内乱といえる。民衆の逮捕されて検事処分をうけたもの八、二五三人、うち起訴されたもの七、七七六八、懲役刑に処せられたものは無期七人をふくめて二、六四五人、ほかに死刑が二人ある。また宇部炭坑で坑夫十三人が射殺され、神戸で数人が刺殺されたのをはじめ、軍隊に殺された民衆は三十人以上と推定される。これだけの全国いっせいの大暴動は、日本歴史のこれ以前に一度もなく、以後にもない。

(3) 騒動のきっかけはいままでもなく、米価の暴騰である。神戸市はとくにひどくて、春ごろは一升三十銭前後の普通米が、八月一日には四十銭をこえ、十一日夜の騒動はつぱつの日には六十銭八厘もした。「二升の米代に一円三十銭もとられる」という新聞記事もある。米は急にこんなに高くなるのに、賃金、収入はそれに合せて上るわけがない。食費、それも主として米代が生計費の大部分をしめる工場労働者、仲仕そ

のほか種々の日雇い労役者、職人、当時「細民」とよばれたきわめて収入不安定な雑業者たちが、これでは生活ができないのは必然であった。

米の暴騰の根本原因は、寄生地主制が支配する農業の生産力が当時の空前の高景気がひきおこした都市人口の激増、米の需要の激増に追いつけなかつたことにあるが、そのうえ政府は、地主の利益を第一に考えて米価を下げる有効な政策、たとえば外来輸入関税をやめ輸入を自由にすることなどを全然行なわなかったで、一八年春から、米価は上りつづけた。そして七月十三日、政府がシベリアに出兵することが確実になつたとたんに、米価は糸のきれたたこのように天高く舞い上りはじめた。神戸では七月十二日に一升三十四銭五厘の米が十四日には三十五銭九厘になり、八月八日ついに前記の六十銭以上となる。

この当時、一方では本人も気づかないうちに、民衆の思想に重大な変化が進行していた。一九〇五年九月の「日比谷焼き打ち事件」といわれる、じつさいは東京全市の警察機関の七割以上を焼き打ちした空前の反政府暴動以来、民衆が自分たちの要求を街頭の行動で為政者につきつけ

ることがたびたびおこりはじめた。民主主義と人権の思想は、日本社会の最低辺におしつけられた被差別部落にもしみ通りはじめていた。そこへロシア社会主義大革命の波動が、日本の人心にも微妙に影響した。むろん米騒動に立ち上つた民衆が、自覚した民主主義者とか社会主義者とかいうのではない。が、人間の生きる権利や人間の平等の思想は彼らの間にもあった。そして目前にみる成金のとほうもないぜいたくと、わがくらしをひきくらべたとき、もはやわが運命のつたなさをなげくだけではなくなっていた。そして民主的な新聞が、民衆のそのような気分をそだてた。さらに多くの新聞雑誌は、

ときの寺内閣の反動と軍国主義をたえず攻撃していた。

(4) このような人心の変化と民衆の急激な生活難とが結びついたところで、米騒動は爆発した。その中で炭鉱の暴動と呉の海軍工廠労働者を主とする暴動をのぞけば、種々の職業の都市無産者の騒動の中では、神戸のそれが行動の激烈で組織的なことでは、ずい一であった。というのは第一に、神戸は大戦の景気で人口が激増し、米価も前記のように全国

一、二の高さであり、またとくに神戸的現象として家賃が米価に比例し、あるいはそれ以上に高くなり、無産市民の生活難はとくにひどかった。

第二に、神戸には買い占め王鈴木商店、船成り金の内田信也をはじめ成り金が集中しており、それへの反感が強かった。第三に、神戸は外米、朝鮮米の輸入港であり、その輸入権を独占した大手四社のうち鈴木と湯浅は神戸にあり、中小三社のうち二社も神戸にあり、彼らの暴利は、荷役労働者が知っていた。第四に、もっとも重要なことは、神戸には多数の近代大工業の労働者がおり、その思想的水準が高かつたことである。

『歴史と神戸』という神戸の人々のつづつている雑誌の第一号(一九六二年八月)は「神戸の米騒動」を特集しているが、それにのつた座談会(兵庫労働金庫発行「生活タイムス57・8・25号より転載)で、神戸米騒動で指導的役割りを果たした本郷強(当時川崎造船所の旋盤工)が七野安隆という同じ川崎の労働者のことを話している。「この七野という男は、いま思うとえらい男でした。昼の休み時間でも、いつも難しい本読んでいた。わしらは当時この小柄な男を心の中でバカにしてましたん

やが、平素かれのいうているいろいろなことが、いつのまにやらわしらのようなものの頭にもしみこんでましたんやろな。いまでも覚えてるのは、彼がこの騒動のときに、「こうしたことがあるたびに世のなががよくなるんや」というた言葉だす」と。本郷はこの七野と二人で鈴木本店に火をつけた。先進的な労働者の思想が、こんなぐあいにつつとはなしに大衆に影響している。

(5) 米騒動は、第一に、婦人、被差別部落の人および一般の労働者、農民に、自分たち自身の大衆行動の威力を自覚させ、世間にもそれを知らせた。第二に、軍隊と警察という国家権力の中核が、どの階級のためのものであるかを、全人民にばくろした。神戸の騒動では、この点がとくに。神戸の騒動では、いま具体的な例をあげる紙面がない。ここから第三に、働らく人民大衆のための民主主義の運動がはじまる。明治の自由民権や米騒動前の民本主義は、有産階級のそれであったが、米騒動後にはじめて、無産階級の民主主義すなわち現代の民主主義の運動がおこる。生きる権利は私有財産権に優先する。生きるためにはいっさいの法

律を破つてよい、ということ、福田徳三博士のような有名なブルジョア経済学者がはい出す。

第四に、米騒動のぼつぱつと政府のシベリア出兵の宣言(八月二日)また遠征軍が東京から東海道線・山陽線を通過するのは、同時であったが、民衆は出兵部隊を見送りもしなかつた。有力な大新聞・大雑誌は、出兵反対の世論をもり上げ、出征のことよりも各地の民衆の動きを報道した。こんなことは太平洋戦争終結前には、ほかにないことで、ここに、知識人の理想主義や宗教家の絶対平和主義とはちがった、民衆の生活と直結した現代的な反戦平和主義がはじまったのである。

(6) さいごに面白い事実をあげよう。毎年夏は学生野球で賑うが、この年も甲子園での第四回全国中等学校野球優勝大会がせまつた。それはあたかも米騒動の最中であつた。その開会予定の前日、八月十六日主催者朝日新聞社は、参加選手団の同意を得て大会をにわかにとりやめた。その理由を、選手団および全国の学生につげた「社告」はいう。「米騒動は学生の周知する範囲外のことであるが、人民が生活の安定

を奪われたために諸君の父兄が深憂しているとき、その父兄の憂いを共にするのは『学生諸君の当然の責務である』その上政府が言論を弾圧して各地の事件の報道をゆるさず、社会を不安におとしつけている中で、『野球大会を開いて歓呼の声をあげる』のは、忍びがたいことではないか。『今や形勢はまことに重大であります。このため諸君が受けた打撃は、無意識に諸君の脳裡に重大な印象を刻みつけます。その印象の刻み目をいっそう深からしめる為にも、本

米騒動余談

『大正七年の長い夏』を観劇して

柳田義一

回顧して五十年前僕が鈴木商店に入店してまもなく、全く予想もつかぬ米騒動が勃発した。

その頃の思い出は今到底言葉に云い尽くせない。

当時の鈴木商店の事業は世界的に動き、飛ぶ鳥も落す全盛の頂点に立つた為でもあろう。噂が噂を生み、政府の命令で他店よりも比較的輸入米多量米穀を取り扱ったところから遂

大会を中止しなければなりません』大会中止のぎせいは大きい。しかしそのぎせいによって得られる教訓の方がはるかにたいせつである」と。学生は社会に関心をもつな、野球でもやっておれ、とばかりにいういまの政府は、この、青年を真の意味で愛しみちびく言論を何と見るであろうか。そんなことをいう新聞があるといけなから「明治百年」をいっそう盛大に祝おう」とでもいうのだろうか。

(京大人文科学研究所教授)

にこの災禍を招いてしまった。八月九日一升六十二銭八厘と云う米の高値に市民は驚きと恐怖を感じさせた。小学校教員の給料平均二十七円の時である。

飢餓地帯にひしめく群衆は遂に暴徒と化し、軍隊出動の破目に迄飛躍したことは千載の痛恨……八方から憎まれた鈴木商店の米買占は、全く無根の事実によせよ港都をここ迄騒が

せたことは大きな黒星で、被害者側の鈴木から見ても確かである。

長い夏の大正七年、金子直吉氏は父柳田富士松の住居、中山手三丁目九十日間滞在、各地から多数の士を日夜招じて父と共にこの対策に頭を絞った。世の動きは遂に寺内内閣の瓦解に追いやることに進んだことは止むを得なかったであろう。

米騒動の直前、店員の報せに店主鈴木よね刀自は息岩治郎氏、孫千代子さん、店員高橋行次氏等に伴われ山陰線三朝のあやしげな温泉宿に避難した。

又、鈴木、金子の家族達は安芸の宮島の宿に事件の鎮まるまで待期した。種々裏話もあるが之は良いとして、ひるがえって僕の家は金子直吉氏が舞い込んで来られたばかりに誰一人避難出来なかった。

僅かに門標をはずす位しか災禍をまのがれる術が無かったのである。身重の母のぶは、この日夜の心労の為にこの年の十一月三日、流産併発黄泉の客となったことは哀しい次第。而して米騒動は我が家にとっても歴史の一頁で、母を想えば米騒動を直感せずにはおれないわけである。

話は転じて今回の米騒動の劇化は

るのである。毎回のたつみ会ではそれを口にせられる人を見かけないが、その底流にそれがあからあのような会の空気が醸し出されると思う。私の如き、最初からの鈴木家の空気を知らぬ人間には特に羨しい限りに思うのである。

因に此史記の一句は、現在清水市にある清見寺境内に、榎本武揚の筆による石碑が建立せられている。榎本武揚の率いた徳川幕府の艦隊が、暴風の為め函館に走れず、その一艦咸臨丸が逆に流されて清水港に難を避けたのであったが官軍と唱えた維新政府の軍艦三隻に包囲せられ、撃沈せられ、その将士の死体が港内に漂流しているのを、時の官軍という官権を恐れず憚るところなく七体を収容して松樹の下に手厚く葬った。次郎長こと山本長五郎の俠気を感じて、明治十九年三月に因縁深い榎本大鳥、黒田等の元勳連中が此碑を建

誠に意義のあるものと高く評価したい。

米騒動は短的に云えば曲り角にあるわが国民衆運動の魁ともなり、今日の正しい組織の下に移り変わる温泉の役目を果たしたとも云えるではないか。

食人之食者死人之事 I・K・生

たつみ会に出席させて頂く度に、旧鈴木商店に働かれた人の心意気というものを、ひしひしと感じる。三井や三菱のように数家又は十数家の主人筋があって、一生の中、主人筋の人を見ずにいるものも早くから欧米流の株式会社組織の中で育った人々、或は又八幡や富士のように役所さながらの組織の中で働いて来た人々で作られている懇親会様の此種の会とは、全く異質の空気を感ずる。私は、或は誘われ、或は招待せられて憶面もなく、此の種の会にも出かけて行った事があるから、たつみ会との間に、かもし出されているアトモスフェアの異質は、敏感に感じ取る事が出来たと思うている。その因って来たるところは、主家、

茲に真のあたり「大正七年の長い夏」を観劇して、更に往時を追憶しこの企劇の重大性をしみじみと感じ続けているのは僕だけではあるまい。

秋深む風に溺れる黄蝶か那 筆者

を中心とするという「抛り処」がある為めと思う。唯単に昔同じ会社には或は、同じ職場に働いた者というだけの心持の人々の寄り合いとの差が醸し出す雰囲気の違いであるという結論を私は出している。此結論は、絶対に間違っていないと信じている。

この「抛り処」ということが大切で、今の世相の悪いのも、此の抛り処がハッキリしていない為めに起っていることが多い。或鹿兒島出身の歌人が、

我が住める薩摩の国は行くとして
明るきに過ぎ寄り所なし
と歌っているが、住む土地や南国の明るい日ざしのみを指しているのではない。心の抛り処を欣求する気持ちを出しているであろう。

兵庫県劇団公演

「大正七年の長い夏」ぬき書き

露路裏

縁台に腰かけて新聞を読んでいる喜助と、わらび餅売りの老人、共同水道で洗濯しているウメとトラ。

トラ(洗濯しながら)昨日でっか、新潟県で、なんや、えらい騒動があったそうやないの。

喜助 あらおとといや、魚津ちゅう町の漁師おかみはん連中がなア。

トラ 神戸でも誰れぞが一騒動おこしてくれたらええのになア。このままやったら、わてら貧乏人は、みな飢え死にするよりしやあない。

一つの家族、一つの会社、一つの国皆然りて、抛り処がハッキリ存在する時、それは強い。此頃いうリーダーというものは抛り処としては、未だ未だ弱い。その差は粘と現代の接着剤の差である。一家の場合抛り処のある場合と無い場合は、其差計り知れぬものがある。近頃の流行りの語呂「カー付き、家付き、婆抜き」などという観念や言葉などでの外で、日本人の淳風美俗を全く破壊している。そんな気風の中で育つ人間では、強い政党も根強い会社の結束も出来る筈がない。今それを一々挙げて憤慨していると余りに長くなるし、血圧の上る思いがするから、茲では差控えることにする。

それにつけても思い出されるのは史記の淮陰侯列伝にある「人の食を食む者は、人の事に死す」という一句である。淮陰侯とは、漢の高祖の創業を助けた例の股くぐりの韓信の事である。私は、現在のたつみ会の空気を考えるにつけて、此の史記列伝の一句を思う。鈴木御主人筋と、その周辺の重立った人々には、高祖と韓信の間の如き心の通ったものがあつたであろう。それが今日尚残っていて、現在たつみ会の会合に見るような親密な而も重厚な気風がある

喜助 ほんまやな…この間の新聞に県の商工課は、米穀組合の保護者であつて、市民の保護者やない、て書いてあつたけど、ほんまですか。

老人 いったい、市長や知事さんはどうい考えてはんねんや。

喜助 それだんが、書いてまんが(新聞を示して)仕方がないそうや。米の値段を押える権限は、知事にも市長にもないそうや。

トラ それやたらなのおのこと、魚津人らやないけど、こっちゃで騒動起すより仕方おまへんがな。おっさん首頭とってやらへんか。やんなはれ。

喜助(老人に)もう、年がいうこときかんわナ。ハッハッハ…あんた近頃神経痛どないだ、わしや眼にきよってな。

老人 座骨神経痛いうやつだんな。若い頃の極道の報いでんなへへ

喜助 へへ…船の釜たきちゅうたら粹やったもの。

老人 船の出航する時は、紅おのわら草履におろしたての白足袋はいて…

喜助 その白足袋を石炭の粉で汚さんというのが釜たきの自慢やった。

老人 サンフランシスコの支那町に女がおりましたやろ。

喜助 お前あの女にやだいぶしぼられた老人 ハッハッハ

ウメ 奥さんに叱られまっせ。

喜助 えっ! (二人で笑う)

月 蝕 橋本 隆 正

曼珠沙華この睦の春戻り来ぬ
秋風や天下御免の翁面
針の孔から月蝕覗く男在り
明月の蝕ぐるや髪膚満つるなり
並べて菊白一色に極まれり

物故社員供養塔献金追加表
2口分 木村 昇 氏
供養塔献金一覧表の誤字訂正
3口 杉 村 馬 太 郎



新開地のサクラビヤホール ドラマ「流れ雲」の中
に使われたサクラビールのセット (NHK提供)